

# 取組のプロセス



## きっかけ

過疎化・高齢化等の危機感、小・中学校の廃校、地域の魅力を発信し、人口増を目指す

【農村協働力の発展】

きれいな大野に、いろんなたくさんの人を呼びたい

多面的機能支払交付金(本県の愛称:水土里サークル活動)



【伝統文化の継承】



【農道の維持管理】



大野原いきいき祭り (1,500人/年の来場者)

## 将来に向けて

- ☑ 地区外から注目される元気な山村集落であり続ける。「ここに住みたい・暮らしたい」を実感できるむらづくり
- ☑ NPO等と連携し、地域特性を活かした更なる農業振興(つらさげ芋の増産、うのばいブランドの確立、新たな加工品開発による所得確保)
- ☑ 地域の魅力を発信し、大野の人口(住む人も来る人も)を増やしたい

## 今後の展望

### Step7 (H27~)

#### 多面的機能支払開始

- 地域住民一体となって(高齢者は出来る作業で参加)活動
- 地域外からの大学生(鹿児島大学や宇都宮大学)も参加・連携し、伝統芸能の棒踊りの継承や台風等の災害後の復旧作業などを実施

## ◆ 誰がどのように・・・?

過疎化、高齢化等への危機感から農業後継者が中心となり、昔の賑わいを取り戻したいとの思いから、青年部や若手女性のアイデアを取り入れ、基盤整備を契機としたブランド化、農地のフル活用に取り組んだ結果、さつまいもの生産が拡大

### Step 1 (H7~27)

#### 基盤整備の実施

- 地域住民からの要望を受け、まずは生産性の向上や定住環境の向上の基盤となる、ほ場整備、農道、集落道路、営農飲雑用水施設の整備に加え、鳥獣害進入防止柵を整備

### Step2 (H17~)

#### 中山間直接支払開始

- 話し合いにより、集落協定締結
- 地域共同による農用地の維持管理、担い手育成・多面的機能の確保、資源保全・環境保全の話し合い開始

【都市農村(イベント)交流】

大野に人を増やしたい

## ☆交流・定住人口の増加に向けた取組

集落では「人を増やしたい」との目標を掲げ、ブランド化した商品のPRや、交流活動の拡大など、「だれが、いつ、どのように」すべきかを見える化し実践

### Step3 (H23、H27)

#### 集落の話し合い (大野づくり計画の策定)

大野地区公民館では、2年7ヶ月、14回の話し合いを重ね、住民みんなで考えた大野地区の未来「大野づくり計画」を平成23年に策定。(H27改定)

【ブランド化】



つらさげ芋に続く新たな特産品開発(干し芋、おいもチップス、プリンなど)



### Step4 (H23~)

#### 6次産業化

加工グループ「高峠わかば会(H20~)」が、伝統食「つらさげ芋」の加工品開発・製造・販売などブランド化に取り組み、地域が活性化

### Step5 (H25~)

#### 多様な主体との連携

- 「NPO法人森人くらぶ(H25~)」は、地域住民が気づかない資源を引き出すなど、外部の若い力(I・Uターン者、学生)を取り込み、ソーシャルビジネス活動を展開
- 若手女性による「大野原加工ネットワーク(H27~)」は、「高峠わかば会」と連携し、ニジマスを使った燻製づくりなどの商品開発を展開

### Step6

#### 都市農村交流

- 地域イベントの開催により地域の所得を向上
  - ・大野原いきいき祭り(ブランド化した「つらさげ芋」等の直売)
  - ・大野散策フットパス
  - ・軒先カフェ
  - ・廃校跡地利用ニジマス釣り堀
- JICA海外青年研修受入

- 土地利用型農業から園芸作物の導入など高付加価値型農業へ転換。
- 農業用水の安定確保により、施設園芸の導入等が可能となり、所得向上、担い手の確保を実現。
- 「水あり農業」で新規作物、加工品などの自主ブランド品が増加。

地区の特徴

平地地域

野菜・花き

キーワード

高収益作物

6次産業化

集積・集約化

法人化

## 取組前

## 条件不利な離島の農業

- 干ばつや台風など天候に左右される農業
- 十分な水量が確保されておらず、天水に頼る栽培
- 畑かん施設が未整備で散水作業に労力がかかる
- 限られた農地で収益性の高い農業を模索

## 【農業経営形態】

土地利用型農業  
による単一経営が主

【作 目】さとうきび、葉たばこ、花き等

【水 源】ため池 約40万㎡

【生産額】29億円（S62時点）



## 取組内容

## 労働集約型農業への転換

- 高収益作物の導入  
花き、野菜、観葉植物等
- 畜産との複合経営



輪さく



肉用牛



## 用水の確保、安定供給

- 県営かんがい排水事業等（H2～14）
- 国営かんがい排水事業（H16～29）



## 多面的機能支払交付金

- 集落内の清掃、農地保全、農業水利施設の管理を地域共同で行う



## 6次産業化の推進

- 島らっきょうドレッシングやさとうきびから製造したラム酒など、島産農産物の加工品製造・販売

## 取組後

## 農業の振興と次世代の育成、所得向上

【農業経営形態】労働集約型農業による複合経営が多い  
【作 目】葉たばこ、さとうきび、花き、野菜類等  
【水 源】地下ダム等 約140万㎡  
【生産額】43億円（H29時点）

## 【農業用水の確保と高収益作物の導入】

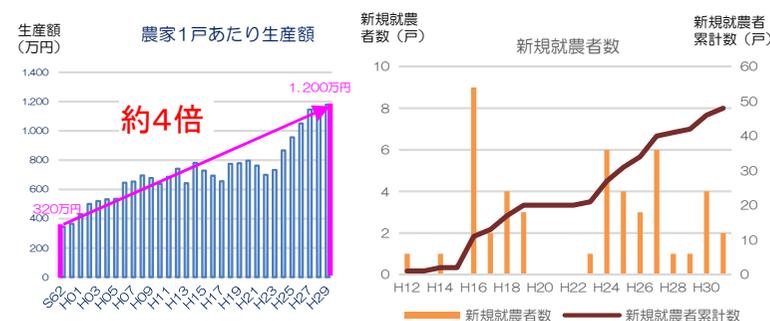
○ 1戸当たり農業生産額がS62の320万円からH29は1,200万円となり、約30年で約4倍に増加。特に、「水あり農業」が進展したH23頃から、農地集積及び農業の収益性が高まった。

## 【担い手育成】

○ 若い担い手が増加していることから、村内の農家交流会等による農家間の営農技術や女性農業者等も参加する農業簿記経営講座の開催による経営技術の向上。

## 【定住促進等の取組】

○ 儲かる農業で若者の担い手や担い手農家の後継者など新規就農者が増加。定住促進の取組や民泊の活動が、人口維持に繋がっている。



◆ 誰がどのように・・・?

干ばつや台風による農業収入の減少、過疎化による担い手不足に対し、地域農業者が中心となり、儲かる農業の実現を目標に話し合った結果、高収益作物の導入、基盤整備を推進

西江上区から伊江村全体に高収益作物栽培が広がり、農業用水の不足が見込まれたため、地下ダム等建設を推進する伊江地区管理体制整備推進協議会をH12に設立し、島全体の取組に発展

面積が少ない離島では、農地をため池用地にする余地が少ない



**Step1 (S49~)**  
**高収益作物導入**

- さとうきび中心の営農から葉たばこ、かんしょ、キク（露地）等の高収益作物を導入

**Step2 (S55~)**  
**水源（ため池）の整備**

- 県営、団体営かんがい排水事業により、高収益作物の導入に向けて、既存ため池を活用した畑かん施設の導入
- 西江上区に、ため池の運用を行う西部かん水組合を設立

**Step3 (H16~)**  
**地下ダムの建設**

- ため池のみへの依存に限界があったため、国営かんがい排水事業により、地下ダムの建設による80万m<sup>3</sup>の新規水源開発等を実施

**Step4 (H19~)**  
**水利施設の保全・管理**

- 整備が進んだ水利施設の保全・管理を行うため、西部かん水組合を中心とした「伊江村農地・水・管理協定運営委員会」を設立

**☆水あり農業による農業収入の増加**

農業者の減少が進む中、経営の効率化や農作業負担の軽減を図るため、村が中心となり、各集落の代表、JA、普及センター等と話し合いを重ね、水あり農業による営農体制の構築や園芸作物等の生産拡大について合意形成

**☆担い手育成・女性活躍**

経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進に向けた取組を活発に実施

西江上区の農家等が中心的な役割を担っている

多面的機能支払交付金を活用



スプリンクラー散水

**将来に向けて**

- ☑ 持続的な地域農業の構築に向け、低コスト耐候性ハウス等の更なる導入、新技術の導入・技術向上を推進
- ☑ 農業後継者の受け皿構築を目指し、担い手等の定住促進に向け住宅等の建設を推進

今後の展望

**Step7 (H30~)**  
**担い手育成**

- 伊江村は、若手農家の技術向上を目指す村内農家交流会や女性農業者等の経営参画を目的とした農業簿記経営講座を開催し、農家の経営力を向上

**Step6 (H27~)**  
**新しい農業への挑戦**

- 「水あり農業」で増加した後継農業者が中心となり、ICT機器を導入し、省力化、疲労軽減、品質向上
- キクの直蒔き等、栽培方法を工夫

**Step5 (H22~)**  
**6次産業化の推進**

- 「水あり農業」により増産された島らっきょうを利用したドレッシングや、さとうきびを原料にしたラム酒など加工品の製造、販売が増加



島らっきょうドレッシング



ラム酒

地域資源保全  
美しい農村  
再エネ等  
水利施設  
防災・減災力